留学生の声

塾内在籍校・学年（派遣時）	慶應義塾湘南藤沢高等部 2 年
留学先校名	Choate Rosemary Hall
留学期間	2019 年　9 月から　2020 年　4 月まで

なぜ留学を志しましたか？

留学を志したのは小学 6 年生の時に、慶應義塾一貫教育校派遣留学制度が始まったというニュースを読んだ時でした。当時はアメリカに住んでいたため、慶應義塾湘南藤沢の一員になり、この留学制度で再び渡米したい、と強く思いました。

入学した後も、派遣留学制度に応募することが常に自らの目標でした。幸運にも、進学するにつれて、異文化交流の重要性に気づく機会に度々恵まれました。さらに、小学生の頃とは違った視点で、国際社会という大舞台で活躍する生徒たちと交流を図ることで、彼らの技術や考えを日本に持ち帰りたいと強く思い、留学を再決意しました。

留学に向けて、どのような目標を立てましたか？

世界中から集う優秀な生徒たちと意見を交わすだけでなく、今後日本人が国際的に活躍するために必要な素質を探り、日本に持ち帰ることでした。インターナショナルの生徒としてではなく、留学先の一生徒として好成績を収めることも目標にして勉学に励みました。

もう一点常に意識したことは、一期生として、日本人、および、慶應の学生としての個性をどう表現するかです。SFC での 4 年間の活動を通して培った「自分」と、Choate で新たに確立する「自分」をいかに融合するかが大きな課題でした。

留学を振り返って

最善を尽くし、期待以上の出会いと機会に恵まれた一年を過ごすことができました。中でも特に印象に残った 4 点を以下に記しました。

1. 学びに対する態度

勉強面では、無難に成績を取るのではなく、興味があることに挑戦し、アメリカのボーディングスクールだからこそ受講できる授業を取ろうと決めていました。したがって、実際に授業が始まってから、多くのクラスにおいてレベルの不一致を感じたため、6 授業中 5 授業に関しては一つ上のクラスに変えてもらいました。クラスの変更に際しては、エッセイの提出や教科長とのミーティングが必要となり、SFC で使用していたテキストを使って既に学習した範囲を説明する機会もありました。多くのクラスに編入という形で入ることに大きな不安はありましたが、どの先生も質問を快く受け付けてくださったため、今までならばあまり追求しなかったであろう疑問点にも、とことん付き合っていただきました。結果として、学校の勉強という枠を超えて、自分の疑問点に向き合い、追求することの大切さ、そして、面白さに触れることができたと実感しています。Choate の先生方には、授業だけでなく生活全般において親身に対応していただき、心より感謝しています。

2. 国際色豊かな仲間

異なる人生経験を持つクラスメートや寮生たちと意見を交わすことで、改めていかに自分が恵まれているかに気付かされました。母国が戦争の渦に飲み込まれそうな生徒や、発言の自由が確保できない生徒、ご両親から逃れたい一心で学んでいる生徒に出会い、自分の中の価値観が大きく変わりました。苦しい中を皆懸命に生き、勉学に励んでいるという気付きは、自分自身が大変な時の心の糧になり、視野を広げる契機になったと実感しています。

2. 気付きを行動に変える力

どの生徒も現状に甘んじず、常に Choate を、さらには世の中を、より良い場所にしたいという熱量を持っていました。生徒会を通じて生徒の声が学校側に直接届くようなシステムが確立されていたため、生徒たちの熱意はありのままの形で先生方に伝わっていました。その一例に、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、学費が払えないかもしれないという懸念の声を受け、生徒たちが独自に寄付システムを立ち上げ、1 ヶ月で$1400 以上の寄付金を集めました。先生や学校運営が絶対的ではなく、生徒たちが自らの力

を信じ、信念を貫き通す姿はとても刺激的でした。

4. 地域との交流

Choate は Wallingford という町の中に学校が属しているため、地域とのつながりが築けました。特に Community Service を通じて、様々な経済的・社会的状況に置かれている人々に出会い、意見を交わすことができました。また、地域の女性起業家の方々とお会いすることで、身近な場所で活躍している女性のお話が聞けたことは貴重な体験でした。町全体をキャンパスと捉える学校の方針がとてもよく理解でき、地域の方々との交流を通じて多くの学びがあったと感じています。

課外活動は何をしていましたか？

秋 Community Service:

週三回、学校が属する Wallingford の町でのボランティア活動に参加しました。月曜日は全員 Connecticut Food Bank にて食品の選別などを行うことが義務付けられていましたが、それ以外の二日は選択肢から選ぶことができました。私は Master's Manna という無料食事提供を行っている施設での活動と、Boys and Girls Club という小学生たちのシッターとなる活動を選択しました。地域の方と顔見知りになり、学校のそばを通ったときには声を掛けていただけるようになっただけでなく、自分の町に住む様々な立場の方々と交流することができた貴重な体験でした。

冬 Winter Running:

挑戦したことのないスポーツに取り組もうと思い、参加しました。如何なる天候でも走り、雪が降る中も欠かさずトレーニングがありました。自分のペースで走ることができただけでなく、学校周辺の地形にも詳しくなり、普段とは異なる景色を楽しむ良い気分転換になりました。また、クラスや寮を超えた新しい友達を作ることもできました。

Choate Public Health:

学校の公衆衛生紙で、記者として所属していました。テーマの選定、執筆、校正、出版の全てが生徒の手でなされています。春休み初旬に新型コロナウイルスの感染が世界的に拡大し始めたことを受け、COVID-19 特集が組まれた際、すでに国として学校を閉鎖していた日本についての記事を執筆しました。
日本人という自らのアイデンティティを校内紙に残すことができ、嬉しかったです。

Diversity Day:

生徒同士が多様性に関して話し合うイベントで、数年前から完全に生徒主導で行われている活動です。会話を主導する facilitator として参加するために、3 時間のトレーニングセッションを 3 回受けました。自分が誘導したかった方向に話し合いが進まなかった時にはどう対応するか、他者の発言に傷ついてしまった生徒がいたらどうするべきかなど、緊急事態への対応に関する説明がかなり多く、興味深かったです。当日は、歴史的に立場の弱い人や団体への問題的な態度とそれに対する解決策について話し合いました。生徒たちが自らの信念や政治的信意見を怯まずに述べる姿は刺激的だったものの、過激な発言をする生徒もおり、事態の収拾が難しかったです。また、多くの facilitator や参加した生徒たちから、1 日きりのイベントにするのではなく、毎日が Diversity Day であるべきだとの意見も多数あり、Choate の生徒たちの現状に甘んじない向上心が感じられた活動でした。

授業について

Choate での授業の特徴として規模が極めて小さいことが挙げられます。どの授業も 7~12 人程度だったため、クラスメート一人一人についてよく知ることができ、発言もしやすかったです。また、先生と生徒との距離が近く、お互いのことをよく把握していたため、個人的な興味の追求や質問が非常にしやすい環境でした。

全教科において、ディスカッションベースの授業だったため、知識に加え、自分の意見が求められ、評価されました。理系科目であっても分からない点を共有したり、お互いに教え合ったりすることが多い授業形態は、とても新鮮でした。話の流れを汲み取り、適宜発言することが求められていたため、授業中に挙手することは一度もありませんでした。一回の授業時間も日本での 50 分よりも 20 分長い 70 分でした。当初はずっと興味を持って受講できるか不安でしたが、会話が盛り上がっている授業だと一瞬にして終わってしまったかのように感じることが多々ありました。

リモート授業について

リモート授業は日本時間の 23:00 から 4:50 まであり、70 分だった授業時間が 50 分に短縮されたこと以外、1 日のコマ数などの変更はありませんでした。日本を含め、時差が大きい国の生徒は深夜の授業への出席が求められず、録画を見るように指示がありましたが、出来るだけリアルタイムでの参加を希望していたため、2 時台までの授業には出席し、それ以降は日中に録画した授業を確認していました。先生によ

ては、日本や韓国、中国に住む生徒のことを考え、授業時間を調整してくださいました。

授業の進め方は通常時とあまり変わらず、勉強量の増減はほとんど感じられませんでした。会話ベースの授業はどうなることかと心配しましたが、いざ始まってみるとスクリーン上に全員の顔が表示されるため喋りやすく、問題なく進みました。また、先生方も Zoom の扱い方に慣れており、わからないところは先生と生徒が互いに助け合いながら進めていく姿勢が常に見られました。

そのほかにも、学年や学校のミーティングがオンラインで開催され、一度に 800 人以上の生徒が集まることもありました。離れていても大勢の人の顔を見ることができ、とても嬉しかったです。また、オンラインダンスパーティーも開催されました。あらかじめ、かけて欲しい曲を募集し、当日は Zoom 上でリクエスト曲を流すという形式で、離れていても一つの学校としての意識を持ち続けることができました。ダンスや劇、放課後のアクティビティなどがキャンセルされてしまい、残念な気持ちがあった一方で、新たな学習方法や連絡方法に触れることができました。また、離れていても相手への思いやりを忘れないクラスメートや先生方との交流を通じ、勉強内容以上の学びを得たリモート学習でした。

今後の派遣留学生へのアドバイス

留学の目標や目的を渡航前に確認しておくことが大切だと思います。忙しい時や大変な時に明確な目標や目的があると、めげずに、意味のある毎日を送ることができると思います。この一年が終わって、日本に帰国した時にどんな自分になっていたいかを考えるだけでも、留学生活がより有意義なものになるのではないかと感じています。また、自分を支えてくださっている方への感謝の気持ちを常に忘れずにいたことが、自分のやる気に繋がっていたと思います。困っているときはなんでも一人で抱え込まず、人に相談しながらやるべきことをこなしていくことも大切だと思います。

渡航してからの最初の数週間は特に、慣れない環境下において、不安に思うことが多かったり、自信が揺らいだりすることがあると思います。しかし、Choate は、常に向上心を持ち、努力し続ける生徒たちの集う場所です。自分の最善を尽くし、自らの興味と熱意に忠実に努力を重ねれば、必ず周りは認めてくれますし、自分の納得のいく留学生活が送れると思います。また、周りからできるだけ多くのことを吸収すると同時に、自らの個性とアイデンティティを発揮し、他者の留学経験にも貢献できるように行動すると、さらに意味のある留学生活を送ることができるはずです。

留学に行くからには必ず何か新しいことに挑戦しなければならないと気負ってしまうかもしれませんが、自分の留学生活を振り返ると、今すでに興味があることを深めて行くのもいいと思います。日本の学校に比べると圧倒的に教科数が少ないため、留学中は１つ１つの教科や課外活動に専念し、極めることができる貴重な時間です。楽しむことを忘れずに、多くの発見や実りのある留学生活を、みなさまが送れることを心より願っております。

以上